

2022 年度 聖学院大学

公募制推薦入学試験 小論文 問題

- 問 次の文章を読んで、以下の①と②について、合わせて 800 字以内で記述しなさい。
- ① 下線部「この非対称はとても不思議だ」、「理解はつねに時間的な出来事でもある」に注目しながら、他者と自分との関係にどのようなことが起こるのか、筆者の考えを説明しなさい。
- ② 他人を理解することにおいて大切にしたいことは何か、あなたの考えを述べなさい。

家裁[※]で調停の仕事をしている知人から、こんな話を聞いたことがある。言いあって、言いあって、言いあったはてに、万策尽きて、もはや歩み寄りの余地、「合意」の余地はないとあきらめきったそのときから、ようやく「分かりあう」ということがはじまる、と。この話はいろんなことを考えさせる。

まず、分かる、理解するというのは、感情の一致、意見の一致をみるということではないということ。むしろ同じことに直面しても、ああこのひとはこんなふうに感じるのかというように、自他のあいだの差異を深く、そして微細に思い知らされることだということ。言いかえると、他人の想いにふれて、それをじぶんの理解の枠におさまろうとしないということ。そのことでひとは他者としての他者の存在にはじめて接することになる。

ということは、他者の理解においては、同じ想いになることではなく、じぶんにはとても了解したいその想いを、否定するのではなくそれでも了解しようとおもうこと、つまり、その分かろうとする姿勢にこそ他者はときに応えるということである。そして相手には、そのなんとか分かりたいという気持ちそのものが、かろうじて、しかしたしかに、伝わるのだ。つまり、ことばを受けとってくれたという感触のほうが、主張を受け入れてくれたということよりも意味が大きい。言っていることが認められたというよりも、言ったことばが、たとえまちがっていても、しかしとりあえずそのまま受け入れられた、それがそれとして肯定されたという感触が大切なのだとおもう。

事実、ひとには、それがじぶんにとって重大であればあるほど分かれてたまるかという想いがある。大事なことをようやくとぼそぼそと、あるいはとつとつと、口にしたときに、「その気持ち、分かります」などと言われれば、かえって「何が分かったの？」と返したくなる。あるいは逆に、聴く側とすれば、ここで分らないといけないのだろうけれど、でもどうしても分かりたくないというシチュエーションもあるだろう。真剣に聴こうとすればするほど、そういうことは起こりがちである。もっとややこしいこともある。他人の話を聴くときには、相手が「分かってもらえてうれしい」と言ってくれたときでさえも、じぶんはほんとうにこのひとのことが分かっているのか、どうしても分からない、分かったという感触がない……などとなかなか納得がいかないものなのに、じぶんが聴いてもらうときにはなぜか、ああ、分かってもらえたという確信のようなものがしっかり生まれるものである。この非対称はとても不思議だ。

このように見えてくると、理解するとは、合意とか合一といった到着点をめがけるものではなく、分からないままに身をさらしあう果てしないプロセスなのではないかとおもえてくる。一致よりも不一致、伝達よりも伝達不能、それを思い知ることこそが、理解においては重要な意味をもつ、と。そういう苦い過程を踏んだあとでこそ、「あのときは分からなかったけれど、いまだったら分かる」ということも起こるのではないだろうか。そのとき、そういう過程をくぐることで、わたし自身が変わったのだ。そういう出来事が起こることが大事なのであって、その場で分かるか分からないかはたいしたことではない。理解はつねに時間的な出来事でもあるのだ。そのかぎりでは、他者を理解することのうちには、他者の想いにふれ、それを受け入れることで、自己のうちに何かが変わる、これまでとは違ったふうに住んを感じられるようになるという出来事が起こるということが含まれているのだとおもう。

結局、じぶんとの関係がどうこうということを離れて、つまりじぶんが言ったことが承認されるかされないかは別にして、それでもじぶんのことを分かろうと相手がじぶんに関心をもちつづけていてくれることを相手のことばやふるまいのうちに確認できたとき、ひとは「分かってもらえた」と感じるのだろう。理解できないからといってこの場から立ち去らないこと、それでもなんとか分かろうとすること、その姿勢が理解においてはいちばんたいせつなのだろう。

※ 家裁：家庭裁判所

河合隼雄・鷲田清一『臨床とことば』朝日文庫 2010 年
(初出は 2003 年、阪急コミュニケーションズ刊)